

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

この日々をずっと…

兵庫県 宝塚市立光丘中学校 二学年

大黒 優衣香

「せいめいほけん？」

弟がそうつぶやいた。まだ何なのかよく分かっていないようだ。私は今日授業で習ったことを自慢げに弟に語った。

「もしもの時のために備えておくのが保険なんだよ。その中でも命に関わるのが生命保険って言うのよ。」

弟がへえー、というように目を大きくしたのを見て私は自然と口角が上がるのを感じる。

そんなやりとりを聞いて、洗濯物を片付けている母が口をはさんできた。

「その通りよ。でも、命に関わらないケガや教育費、老後の生活もみてもらえるのよ。」

姉弟で納得したような表情をしているのがおかしかったのか、くすくす笑いながらさっそく次の仕事を始める。掃除機のコンセントを伸ばしながら、

「そんな真面目な話するなんて珍しいわね。やっぱり宿題？」
と、聞いてきた。さすが産みの親。何でもお見通しのようだ。

「そうだよ。生命保険について作文を書くんだって。」

「ふーん。生命保険にはほとんどの人が入っていると思うわよ。やっぱり未来は分からないし。」

「お母さんも入っているの？」

弟が瞳をキラキラさせて見つめている。

「入っているわよ。ほら、病気とかケガはいつ起こるかわからないのよ。もし、今倒れちゃったらあなた達のお世話ができないじゃない。お父さんに頼んでも、今度は働き手がいなくなるでしょ。生活費に入院費や手術代なんかプラスされたりしたら、家計を考えるだけで寒気がするわ。」

あー寒い、というように腕をさすりながら掃除機を動かす手を休めないところは非常にたくましい。しかし病気やケガは人を選ばない。貧しい子どもでも、大企業の社長夫人でも、優しそうなおじいちゃんでも、誰しも“リスク”を持っている。その“リスク”に備える

第55回中学生作文コンクール

か備えないかはそれぞれの自由だ。

そんなことを考えているとチャイムが鳴った。弟の友達が遊ぼう、と誘いに来たのだった。

「じゃあ、行ってきまーす。」

母と笑顔で送り出すと、すぐに声が聞こえなくなった。

「あの子も遊んでる最中に大ケガとかしちゃうと困るから保険に入っているのよ。」

「どうやら、寂しそうな顔をしていたらしい私に、母が微笑みながらそう言った。」

「何か起こるのはしようがないから、私達は起こってしまったことに對して上手く対処できるようにしなきゃね。」

弟が出て行った玄關を見つめながら自分に言い聞かせるように言ったその言葉は、とても重みのあるものだった。

生命保険はたくさんのお金で成り立っている。誰かが困れば、みんなが出したお金から支払われることとなる。保険に入ること、困っている人を助け、自分が困れば助けてくれる。たくさんのお金の協力で安心して生活していけると言っても過言ではない。

「さて、お洗濯セカンドシーズンといきますか。」

おどけて言ったその言葉が私の笑いのツボにはまり、なかなか笑いが止まらない。

「さて、お手伝いしますか。」

母を真似て言う、母はくすくす笑い、鼻歌を歌いながら部屋を出て行った。あわてて追いかけてながら私は思った。

『こんな穏やかな日々がずっと続けばいいな。』